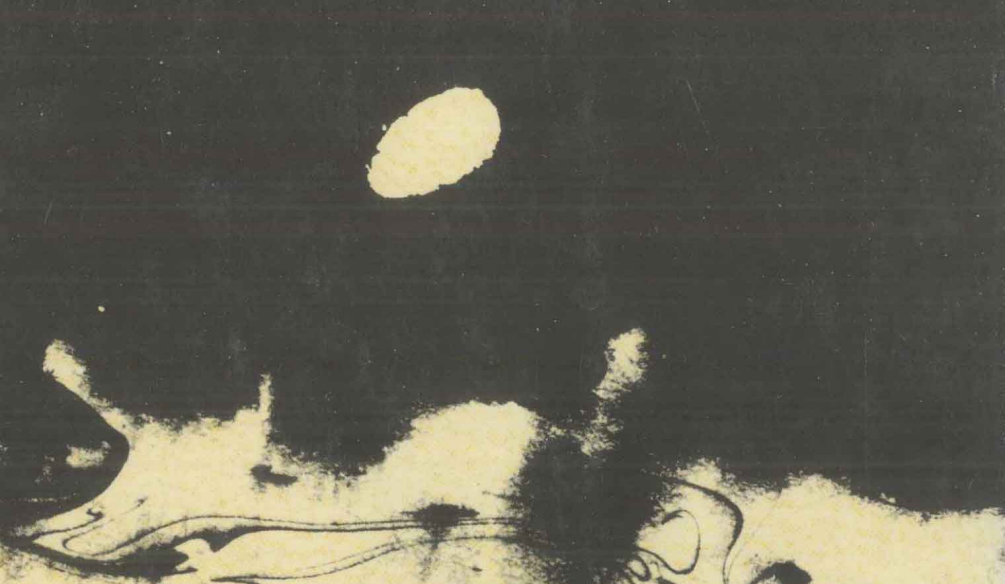




元禄物語

物語と史蹟をたずねて

土橋治重著

成美堂出版

元禄物語

物語と史蹟をたずねて

上橋治重著

成美堂出版

元禄物語◆物語と史蹟をたずねて

著者◆土橋治重

定価◆七〇〇円

初版発行◆昭和四九年一〇月 一日

〇刷発行◆昭和五一年 三月一〇日

発行者◆深見兵吉

本文印刷◆大盛印刷株式会社

カバー印刷◆名古美術印刷株式会社

製本◆有限会社越後堂製本

発行所◆成美堂出版株式会社

東京都文京区関口一丁目三三ノ四

電話◆東京二〇二一〇六九七

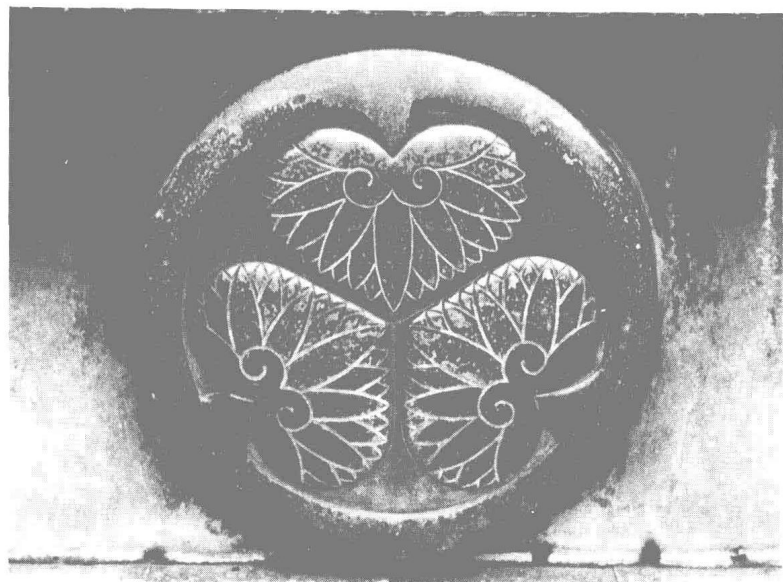
振替◆東京四四六六

郵便番号◆一一二

落丁・乱丁本はお取り替えます

目

次



徳川家定紋

★は〈史蹟探訪〉を、☆は〈スポット〉を示す。

小判の威力	9
★新吉原	15
親と子	16
★護国寺	22
☆玉の輿	22
果断な將軍	23
★館林城	26
☆越後騒動	26
☆振袖火事	27
浪人、曲淵新十郎	28
☆由比正雪の乱	34
美しい夜桜	35
★深川八幡	41
☆岡場所考	41
吉保苦悶	42
つばめをとって斬罪	47
★小塚原刑場と千住回向院	52
★八丈島	52
心術の効能	53

☆大名 58

☆旗本 58

空っ風のなか……………59

☆小野派一刀流 64

☆甲源一刀流 65

ぜいたくな暮らしの勝利……………66

★向島 73

奥の細道への旅……………74

★深川芭蕉庵 79

☆『奥の細道』 79

江戸の女の意地……………81

☆寛永寺と家綱の葬儀 87

☆奈良茂伝説 87

ヒョットコとオカメのお面をつけた曲者……………88

☆大奥 93

ケンペル恋愛歌をうたう……………94

★江戸城 99

★湯島の聖堂 99

★オランダ商館 100

將軍お成り……………101

★木場 106

☆『三王外記』 106

十五夜の月……………108

☆隅田川 113

☆紀文の邸宅と墓 113

吉保、川越城主となる……………114

★川越城 118

金と女と権力の夢……………119

★銀座跡 126

★金座跡 126

☆幕府のふところ 126

☆金・銀貨の質 128

☆三井の商法 128

大屋敷襲撃……………129

★中野の犬小屋跡 134

仇討ち余聞……………135

☆『三王外記』の著者 140

上から下へ……………141

己れを知るもののために……………146

☆林家の祖、羅山 151

芝居見物のいっとき……………152

★浮世絵 158

よろこびとかなしみの涙……………159

★六義園 164

紀文豪遊……………165

☆相つく俗書 170

切腹の人と栄達の人…………… 171

★江戸城松の廊下跡 176
★浅野内匠頭切腹の地 176

★浅野鉄砲洲屋敷跡 176

吉保と良雄…………… 177

★泉岳寺 183
★吉良邸跡 183

☆忠臣蔵異聞 184

人の盛りは二十年…………… 185

☆徳川氏略系図 190
★甲府城 190

☆甲府城実測図 191

父祖の山河…………… 192

☆柳沢吉保論 197

ふたたび雪の降る日に…………… 198

☆紀文と奈良茂の末路 203
☆武田信玄と柳沢吉保 203

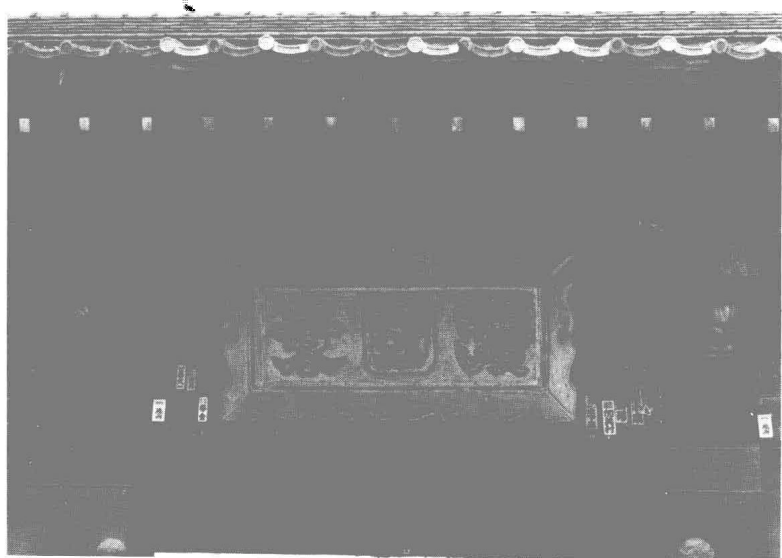
★恵林寺 204

☆『甲斐少将吉保朝臣実記』 204

★大和郡山の柳沢氏 206
★柳沢氏略系図 207

元禄物語年表	208
おもな登場人物	216
あとがき	223

元禄物語



護国寺扁額

小判の威力

柳沢吉保は、供を一人連れ、顔を白絹の頭巾でつつんで新吉原仲ノ町をゆうゆうと歩いて行く。

貞享二年（一六八五）十二月二十日の夕暮れどきであつた。

吉保はこの月の十日に従五位下出羽守に任官したばかりの將軍御側役で、名は保明といい、美濃守吉保と名のつたのはずっと後のことだが、この物語では、はじめから吉保で通していきたいと思う。

元禄というきらびやかな太平ムードの時代を三年後にひかえた新吉原は、ひらきはじめて花のように生氣に満ち、郭内に百数十軒の傾城屋、揚屋が建ちならび、ピンからキリまで数千の遊女が、その「女

性美”を売っているのである。

ここには武士、町人、僧侶、百姓、職人その他あらゆる階級のものがやってきて、もう昼すぎるころから歌舞音曲をまじえて、まるで祭りのようにぎわいを呈する。

大名、高級旗本、上席の大名の家臣、豪商などもおおつぱらにやってくる。彼らは揚屋にのぼって、そこへ太夫と名のつく遊女を呼び、必要に応じて政治的な関係者を招いて、ともに遊興し、取り引きをするのだ。

ほぼ七、八町四方ある郭内は、六町に分かれていて、まんなかの仲ノ町が広い中央通りになっている。ここは遊客がもっとも多い。吉保のように顔を頭巾でつつんでいる武士も少なくない。みな一様に、両側の傾城屋で張り店をしている遊女たちを覗きこんで、冗談をいったり、遊女が気に入らないと、悪態をついて離れたりしている。江戸の師走は寒い、そんな寒さなどてんで気にしてはいない。

やがて、傾城屋、揚屋の大小の行燈に灯がはいり、百匁ろうそくがともされると、この一郭は華やかな

不夜城と化した。

吉保は格子のなかの遊女たちから、

「ちよっと、ちよっと、お殿様とのさま。顔を拝ましてくださいまし」

「ようすのよいお殿様、こちらにいらっしやらぬと、死んだら化けて出ますぞえ」

「へえんだ！ おすましの殿様」

などと声をかけられた。

吉保は仲ノ町にはいつてきたときから声をかけられたのだが、灯がともると、遊女たちの声には商売ぬきのひびきがこもった。

吉保はこのとき二十八歳。紫むらさきちりめんの羽織と着物を着、同色の馬乗袴うまのりばかまをはいた、すらりとした長身に白頭巾がよく似合い、その頭巾のなかの顔は、どんなに美男かと女たちには思われたのだ。

じじつ、数々の男性を見てきた遊女たちの目に狂いはなく、吉保のやや長面で、神経質の苦味にがみ走った顔はたしかに美男だった。

「殿様、もうこのへんで、お引き返しなさいましては？」

供は吉保の遠縁にあたる若者で、柳沢隼人はやとという。一昨年加増されて千三十石、御納戸頭役になったときから家来にした。隼人は頭巾をかぶっていない。愛嬌あいぎょうのある顔だが、美男ではない。

「うむ。おもしろいではないか。もうすこし、歩いてみよう」

「さようで」

遊興するつもりで、この郭にはいつてきたものではなかった。遊ぶなら揚屋へ行つて太夫を呼ぶ。

吉保はこの七月に、主君の五代將軍徳川綱吉が、みずから命じて発せさせたへ生類憐みの令しやうるいあわれが、実際にはどのように受けとられ、実行されているか、その視察にきてのもどりみち、ここへ寄つたのだ。

江戸えどは広い。町人町ちやうじんまちでも八百八町といわれているほどなので、その一部をまわるにしても、徒歩では不可能だ。

西の丸下の屋敷を馬で出て、途中、あちこちの馬宿に馬をあずけ、日本橋、中橋、京橋などの繁華街をまわつたが、その活気のある繁盛ぶりに吉保は神



経が疲れた。その疲れを癒やすためにも、噂に高いこの新吉原へやってきた。むろん、はじめてである。二頭の馬は大門わきの茶屋につないである。ここは、馬はもとより、乗り物はいっさい通さない。大名でも歩いて行かなければならない。そんなしきたりが、いつのまにかできているのだ。

あの〈生類憐みの令〉など、人びとはまるで問題にしていない。どこ吹く風だ。あした、上様になんと申しあげたらよいのか……。

吉保のころにはそのことが石のように重く沈んでいた。しかし、その石のような重みを遊女たちの姿態や声々がしだいに軽くした。

まだ若い吉保にとっては、遊女町の不思議な魅力はきわめて新鮮であった。

「まあ！ この郭はじまって以来、はじめてのような粋な殿様、今業平様、ほんのお薬のほどでも、お顔をお見せくださいまし……そしたら、あたくしは死んでもようございます」

遊郭はじまって以来の粋な殿様などといわれると、悪い気持ちはしない。

ふっと、吉保は声のした格子のなかを見た。

張り店をしているから、上等の遊女でないのはもちろんだが、二重^{ふたまた}瞼の大きな目が情熱的に燃えている。商売の技巧だけで燃やしているとも思えない。

「そち」

「?.....」

「からだを大事にするがよいぞ」

遊客のことばではない。

吉保は格子のなかにつながれているその女が、ふっと哀れになったのである。

「.....」

遊女はあつけにとられたように、大きな目でじつと吉保を見つめた。身分のあるらしい侍から、こんなことばをかけられたことはなかったにちがいない。そのとき、二、三十間^{けん}先の傾城屋で、とつぜん、どなり声や物音が起こった。

「喧嘩^{けんか}だ！」

「神田^{かんだ}の「きはひ組」だ！」

という叫びが聞こえた。

その声を聞くと、多くの遊客たちはその店先へ集

まって行った。

こうした場所での喧嘩は、暇のある遊客たちにとって格好の見ものである。吉保も見なくなった。

彼は女に一瞥^{いちべつ}を与えると、

「隼人、行ってみようではないか」

と後ろを振り向いた。

「はい、お供します」

護衛役の隼人は腕がたつので、目の保養に……と思っているようだった。

二人が行くと、「三浦屋^{みづらや}」とのれんに大きな字を

染めぬいたその傾城屋から、筋骨のたくましいごろ

つきふうの男がとび出し、そのあとを十人ばかりの

店のものが追ってきた。

遊客たちは、さっと道をあけた。

道のまんなかに立ちはだかったごろつきふうの男は、棒で打ってかかり、組みついてくる店のものを、

拳でなぐりつけ、足でけとばし、地上に投げつけた

りして、ひどく強い。

「「きはひ組」の兄貴分だ！」

「竿竹伝兵衛^{さおたけでんべゑ}だ！」

遊客のなかにはその男を知っているものもあった。

「きほ組」というのは、そのころ、幕府の小普請方で使っている鳶（とび）のものや人足の組のひとつで、ゆすり、たかり、喧嘩で知られていた。「きほい」というのは「請負」がなまったものだった。

喧嘩の原因は、遊客たちのささやきによると、遊女にふられたその腹いせに、払った遊興費を十倍にして返せといつて、暴れだしたというのだ。

「隼人、なかなか強いな」

「御意……正式に修行をしたものではありませんが、喧嘩で習い覚えた腕、あれまでになるには幾百回喧嘩をしておりますよ」

「数百回か」

吉保はあきれたような声を出した。

竿竹伝兵衛といわれた男は、相手をみなやつつけ、最後に残った男を投げとばし、その上に馬乗りになって拳でなぐりつけている。

「わしが、あの男をとり押さえてつかわそう」

「えっ？」

隼人は、それほど腕がたつでもない主人におどろ

いた目をそそいだ。

「わたくしめがとり押さえます」

「いや、そちでは芸がない。まあ、わしにまかせてみるがよい。効き目がなかったら、すかさず手を貸せ」

「？………」

効き目とはどういうことなのか。

隼人は解しかねたが、ときどき、ふつうでは考えられないような知恵を出す主人なので、危なくなったらいつでもとび出すことにした。

吉保はふところに手を入れて、わからないように、なにかとり出し、それを左手ににぎると、つかつかと竿竹伝兵衛のそばに寄った。

「これ、場所柄をわきまえい。色町での乱暴は、はた迷惑と申すもの。とっとと失せろがよいぞ」

素晴らしいながら、伝兵衛の振りあげた右手をしっかりとらえ、その手に、左手ににぎっていたものをつかませた。

ちらりと黄金色が走った。

伝兵衛は、身分の高い武士はこんな喧嘩には介入

しないものだが、それが介入し、右の掌てのひらに三、四枚の小判らしいものをつかませられたので、急におとなしくなった。

その手を吉保のひねるにまかせて、

「あいたた、痛い！」

と声をあげた。

「なら、どこへなりと失せい」

吉保が突きとばすと、伝兵衛はころころころがって行き、起きあがると、

「覚えてろ、このサンピン！」

と捨てぜりふを残して、人ごみのなかにこそそこそともぐりこんだ。

見物の人びとはあっけにとられて、吉保を見まもった。芝居の舞台からぬけ出したような粋な姿をしているが、なんて強いのだろうかと思った。吉保が、すばやく伝兵衛ににぎらせたものがわからなかったのだ。

隼人はやりとした。

彼には、伝兵衛ににぎらせたものが小判だとわかった。

近づいて、

「お強うございました」

といい、

「まことにもって……」

とおかしさをこらえてつけたし、

「さあ、殿、参りましょう」

そう主人をうながした。

「オホホホホ。強いであろうがな」

吉保は女のような笑い声をたてた。彼は「してやったり」というようなおかしいことがあると、意識的に女の笑いかたをするくせがあった。

見物人のどよめきのなかを、二人は大門のほうへ引き返した。

すると、あとから年輩の男が追ってきて声をかけた。

「もし、もし、お武家様。ほんとうにありがとうございます。ございました。てまえば三浦屋の差配でございます。ちよっとお立ち寄りを……お礼を申しあげませんと……」

二人は振り向きも、返事もしない。